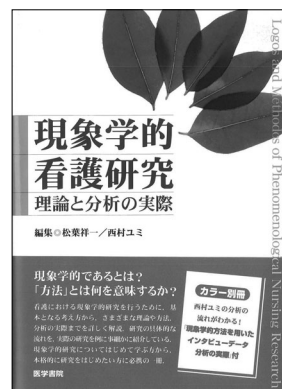


『現象学的看護研究——理論と分析の実際』

「開かれた方法」である
現象学的研究方法への
重い扉を開く待望書

編集：松葉祥一・西村ユミ／本体：3,200 円＋税

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



日本の看護界に現象学が紹介されたのは1960年代であり、1980年代の、「ゲンショウガクとは、どういう字を書くのですか」と問われたときを経て、今日看護師らの現象学への関心は高まっている。それに呼応して何冊かの解説書が出版されているが、「いいのかな？」という思いが続いていた。そんな評者にとって、本書はまさに待望の書である。

「現象学的方法は哲学だけのものではなく、看護を含む経験諸科学に開かれているという立場」に立つ哲学者である松葉と、現象学的研究を続ける看護学者である西村が編者である本書は、看護研究のあり方を具現化しているといえる。すなわち、看護現象の量的研究に統計学者が加わり、実験研究では医学者・工学者等の自然科学者との共同研究がなされているように、看護における現象学的研究には哲学者との協働が必要だということである。

現象学的研究に関心を持つ人には、第1部「第1章 現象学とは何か」「第2章 現象学の歴史」をしっかりと読んでいただきたい。なぜ自分が現象学に関心をもったのかわかるだろう。それはまた、看護学が諸科学の発展の一端にあることを知ることにもなるはずである。「第3章 現象学的看護研究の歴史と現状」は、現象学が看護へ導入された経緯と現状を理解するためにも有益である。

第2部「第1章 質的研究のなかの現象学」では、特に、現象学とグラウンデット・セオリーの違いが分かりやすく示されている。また、ジオルジ、コレツツイらの現象学的研究方法が具体的に示されており、現象学を理解している編者らの血の通った記述である。「第2章 現象学的研究の方法——哲学の視点から」「第3章 ベナーの解釈学的方法」は、初学者にとっては難しいかもしれないので、自分で1度現象学的研究を試みた後に読むと参考になるだろう。

「第3部 現象学的看護研究の実際」は、現象学的研究に取り組もうと考えている人たちにとっては必読であるが、これが唯一の方法であると読むことを、編者らは恐れているはずである。ここでは、特に最後の「私の研究経験」にある、「研究の問いを問い続けていたら、現象学がやってきた」との記述は、現象学的研究方法の真髓をついている。

本書全体が、「研究をはじめる前にあらかじめ現象学的研究をすることを目指したのでは本末転倒」、研究方法自体も「事象そのものから」定められるものであるのが現象学的研究であり、だからこそ現象学の理解が必要なのだという姿勢に貫かれている。また、用語解説や関連書、研究の紹介などもあり、必読書として自信をもってお勧めする。